

## いにしえの映画つれづれ⑰ 外画ドラマ最高視聴率の「ベン・ケーシー」

千葉豹一郎

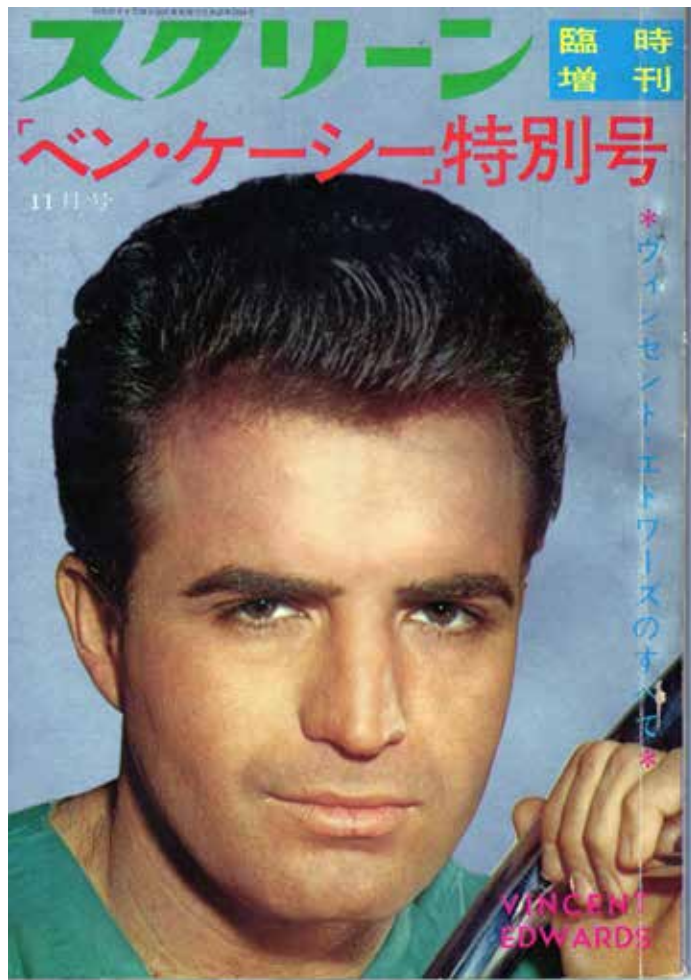
先日、テレビを視ていたら、フランスのマンガ喫茶事情を特集していた。昨今の世界的なマンガやアニメ人気は周知の通りだが、その影響力たるや想像以上だ。特に昔から日本文化と親和性の強いフランスでは、名匠小津安二郎の作品をはじめ、高評価を得てきた日本映画の比ではない。アニメで日本や日本の食べ物などの文化を好きになった、マンガを原語で読みたいがために日本語を学んだという人も少なくない。10年ほど前だったか、アニメで日本に憧れた少女が、夢の国日本に来たかった、と飛行機で密航した事件もあった。アニメやマンガが漫画と呼ばれ、漫画ばかり読んでるとバカになるといわれている

た時代とは隔世の観がある。今やマンガやアニメは、日本が誇る最も平和的な文化、外交の武器であり、どれほど日本のイメージアップに貢献したか知れない。このように、アニメや映画、ドラマなどによって無意識のうちに、その国のイメージが徐々に刷り込まれてゆく。翻ってわが国では、かつてアメリカのテレビドラマが、そうした役割を担っていた。映画とは格段に違う人数が視るテレビの影響力は計り知れず、60代以上ではアメリカの文化などのもろもろをこれらのドラマで知り、アメリカに対するイメージが形作られていったといっても過言ではない。

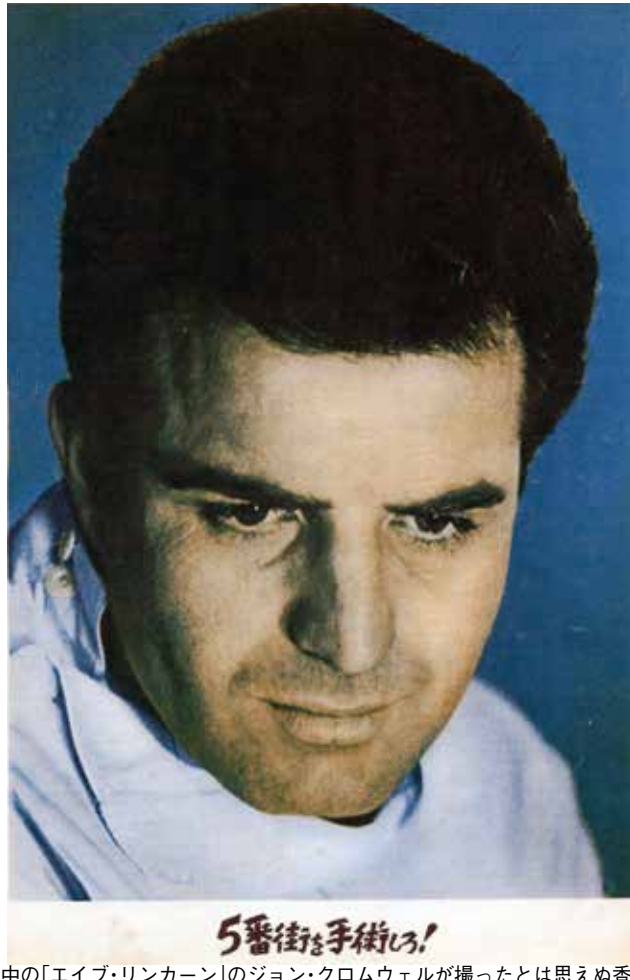
テレビ草創期の日本では、技術面などを含

めてまだ未熟だったため、アメリカのテレビドラマがお手本になり、ゴールデンタイムを中心に多くの時間を占領していた。ドラマの中の豊かなアメリカは憧れの的で、多くの子供たちがアメリカ人に生まれたかっと思つたものだった。これらのドラマは多くの分野に絶大な影響を及ぼしたが、その中でもっともストレートに影響を与え、社会現象を巻き起こして現在までそのよすがを残しているのが医療ドラマの「ベン・ケーシー」である。

その後の「看護婦物語」「ドクター・ウェルビー」「外科医ギャノン」「インターン」「ER 緊急救命室」などに至る医療物のルーツとな



「スクリーン」や「映画の友」から臨時増刊の特集号が出るほどの人気だった。



文中の「エイブ・リンカーン」のジョン・クロムウェルが撮ったとは思えぬ香港を舞台にしたB級アクションなのに、医者物と錯覚させるような邦題があげとい。表紙も手術着姿のエドワーズときて、ここまでくると笑うしかない。

## 外画ドラマ最高視聴率の「ベン・ケーシー」

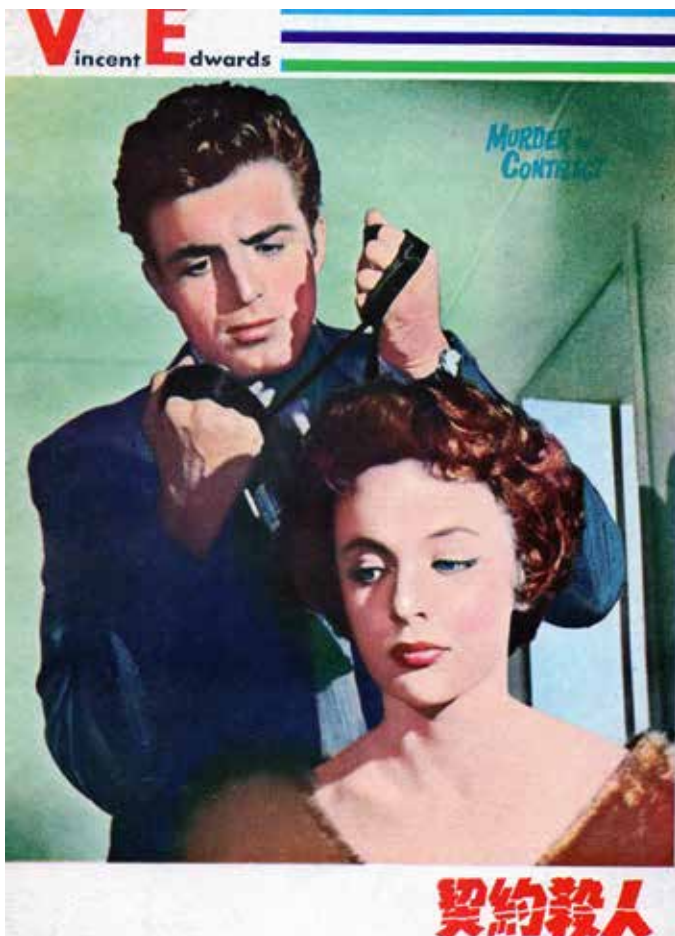
り、日本でも“日本版ベン・ケーシー”といわれた「孤独のメス」をはじめ「白い巨塔」「白い影」最近の「ドクターX～外科医・大門未知子」などが生まれる道筋をつけた。医学界からも高い評価を受け、最新の医療機器や技術などにも注目が集まった。アメリカの医療費が富豪のケネディ大統領さえよほど高額なことなど、まだ負の側面があまり知られていなかったため、すべてが先進的に見え取り入れるべきと考えられたようだ。現在では当たり前になっている、ケーシーが着用しているスポーティなセパレートの手術着が医療現場に定着する契機となり、慶大医学部の倍率や脳神経外科の志望者が急増したという。医者の家系に生まれたケーシー高峰の芸名や、「ドクターX」に出てくる茶トラの猫「ベンケーシー」の名もここから取られ、デヴィッド・ラクシン作曲の印象的なテーマ曲は医療バラエティやCMなどに使われ続けている。前評判も高く、TBS、日テレ、NE

T（現 テレ朝）が争奪戦を繰り広げ、紆余曲折を経てTBSが獲得。スポンサーは三洋電機の一社提供だった。当初こそ十数%だった視聴率は回を重ねるごとに急上昇し、平均40%前後で推移して放映時には銭湯がガラガラになったという逸話も残っている。TBSが感想文を募集したところ、何と12万数千通あまりの応募があったといわれ、最高視聴率は50.6%の外画ドラマとしては最高を記録！現在までこの記録は破られておらず、今後も破られることはないだろう。世界中が固唾を飲んだ「逃亡者」の完結編でさえ31.8%だった（本国では50%と、80年に「ダラス」に破られるまで最高の記録だった）ことを思えば、いかに驚異的な数字だったかがわかるとういうものだ。

当時は、「ハイウェイ・パトロール」「サンセット77」「アンタッチャブル」などの犯罪物、クリント・イーストウッドの「ローハイド」「ララミー牧場」などの西部劇、「うちのマ

マは世界」「ルーシー・ショー」などのホームドラマが、それぞれ人気を博していた。しかし、毎回の激しい銃撃戦が話題になった「アンタッチャブル」を筆頭とした犯罪物における暴力描写が、さすがに本国でも問題視されるようになった。やがて暴力番組追放運動にまで発展し、日本にも飛び火してNHKが呼応。西部劇というだけで撃ち合いなどない「アリゾナ・トム」が締め出されたりした。こうした世論に応えるべく、というよりかわすために台頭してきたのが良心的番組といわれる、「弁護士プレストン」に代表される法廷物や医療ドラマである。

本国では、「ベン・ケーシー」とほぼ同時に「将軍 SHOGUN」(80)のリチャード・チェンバレン主演の「ドクター・キルデア」がスタート。こちらは戦前から戦中にかけて名作「西部戦線異状なし」(30)のルー・エアーズ主演で9本が制作され、スピンオフもある人気作品のテレビ版である（戦争を挟



非情な殺し屋を演じた「契約殺人」。主題曲「殺し屋のテーマ」が63年の日本公開の数年前から流行っていた。



軍隊の非情さを描いた「勝利者」(63)。ペパードとハミルトンの2人のジョージら、当時の若手人気スターが出演していた

# 外画ドラマ最高視聴率の「ベン・ケーシー」

んだこともあってすべて日本未輸入)。本国ではよく知られたキャラクターだけに、「ベン・ケーシー」と互角の人気を得たが、日本では奮わなかった。

共に若き医師の成長物語で、老医師がそれを見守る設定は同じながら、主人公のキャラクターはかなり違っていた。キルデアはインターンで、いかにもアメリカ青年らしい明朗さにあふれ、老医師は「エイブ・リンカーン」(40)で稀代のリンカーン役者と絶賛された名優レイモンド・マッセイが演じた。一方のケーシーは、キルデアより少し年長の脳神経外科医。

私生活を犠牲にすることもいとわない、謹厳実直な医学一筋の硬骨漢である。やや根暗で、笑わないことで有名だった「アンタッチャブル」のエリオット・ネス隊長(ロバート・スタック)にも通じるキャラだが、当時の日本ではこちらの方が受けた。これに、老医師のデヴィッド・ゾーバ博士(サム・ジャッフェ 声:宮口精二→浮田佐武郎)や女性医師

のマギー・グラハム(ベティ・アッカーマン 声:初井言栄→木村俊恵)、同僚のテッド・ホフマン医師(ハリリー・ランダース 声:穂積隆信→村越伊知郎)らが絡む。ジャッフェは、マリリン・モンローの出世作「アスファルト・ジャングル」(50)や日本ロケが話題になったジョン・ウェインの「黒船」(58)などに出演した名脇役で、女性医師役のアッカーマンは30歳以上も年下の妻!もともとは設定されていなかった役だったが、夫の打ち合わせに同行したところをスカウトされ、急遽キャストインした。

オープニングは黒板に書かれる“♂♀”の医学記号で始まり、ストレッチャーに乗せられた女性患者の眼になったカメラが動く天井を捉え、不安な心理を映し出す。ストレッチャーが止まると、誠実で信頼できそうな風貌のベン・ケーシー先生(ヴィンセント・エドワーズ 声:滝田裕介)が患者の前に登場!続くゾーバ博士も、老練で人格者然として観る者に安心感を与え、ここからぐいぐい引

き込まれてゆく。同時期のテレビ・シリーズのオープニングは、いずれも短い中にドラマの内容を的確に表現して深く記憶に残っているものばかりだが、その中でも傑作の部類と言えるだろう。

生死に直結する公立の脳神経外科ゆえ、生と死をめぐる重厚な

貧しい患者も

多く、一様に複雑な事情を抱えている。従軍時の被弾を麻酔をせずに取り出せなどという患者もいて、どの患者も堂々と医師たちと渡り合うことにも、当時の日本人は驚かされた。ケーシーは卓抜した技量で、そんな患者たちのためにつねに全力を尽くす一方、決して妥協を許さず、しばしば上司や同僚らと衝突して時に患者と対立することも珍しくない。そんな彼を温厚なゾーバ博士がいつも庇い、同僚の女性医師マギーとは互いに淡い恋心を抱いている。しかし、ケーシーの献身もむなしく、患者が死んでしまうことも少なくなかった。このあたりが、ケーシーを無敵なスーパードクターにはせず、リアルな手術場面と相まってドラマに深みを与えていた。毎回のゲストも、「パットン大戦車軍団」(70)でアカデミー主演賞を蹴って物議を醸したジョージ・C・スコット、強烈な個性で知られ「キャット・パルー」(65)でアカデミー主演賞を得たリー・マーヴィン、「恋愛専科」(62)で脚光を浴びた美人女優サザヌ・ブレスレット、「刑事コジャック」のテリー・サバラス、「刑事コロンボ」でたびたび犯人を演じたロバート・カルブをはじめ有名スターらが登場し、監督も後に「ある愛の詩」(70)などを撮ったアーサー・ヒラー、「ひとりぼっちの青春」(69)や「追憶」(73)などのシドニー・ポラックらが担当した。完成度の高さは、まだ映画より低く見られていたテレビドラマの質を上げ、一般の認識もあらためたといわれる。このように、「ベン・ケーシー」はさまざまな点で、テレビドラマの流れを変えた不滅の金字塔と位置づけられるだろう。当時のオリジナル吹き替え版が現存する50数本がDVD化されているので、ぜひご覧いただければと思う。

主役のヴィンセント(ヴィンス)・エドワーズは、「悪徳警官」(54)では二枚目ロバート・テイラーの実弟の警官を殺害した犯人、実話を基にした「二十四時間の恐怖」(55)でも犯人の1人、名匠スタンリー・キューブリッ

大スターのウィリアム・ホールデン、クリフ・ロバートソンらに挟まれて影が薄かった「コマンド戦略」(68)。



# 外画ドラマ最高視聴率の「ベン・ケーシー」

クの出世作「現金に体を張れ」(57)では主人公たちが競馬場から強奪した大金を横取りしようとする間男など、アクの強いマスクといかつい体躯を活かして主に悪役を演じていた。歌手としても活躍し、かの大歌手ビング・クロスビーに見出されて、クロスビーのプロダクションで制作する「ベン・ケーシー」に大抜擢された。拳銃をメスに持ち替えたケーシー役はピタリとハマり、一世一代の当たり役となって、何本かの演出も務めた。慰問に訪れた病院で、エドワーズが触れた患者の症状が劇的に改善したこともあったといわれ、誠実な名医の象徴のような存在にまでなった。日本でも大人気を博して、未輸入だった「契約殺人」(58)「五番街を手術しろ！」(59)など古い主演作が急遽輸入された。手術着からはみ出した豊かな胸毛が欲しいという女性ファンも多く、来日した際には行く先々で大歓迎を受けた。

しかし、その後の俳優人生は芳しくなかった。問題作「勝利者」(63)やウィリアム・ホールデンやクリフ・ロバートソンと共演した「コマンド戦略」(68)などに出演したが、あまりにもベン・ケーシーのイメージが強過ぎたこともあって、目ぼしい作品には出会えなかった。柳の下の泥鰌を狙った医療ドラマ「マット・リンカーン」(70～71未)に徐々に主演するも短命に終わり、「マッドボンバー」(72)のようなB級アクションや、黒人嫌いの消防士に扮した「猛火と闘う男たち ファイヤーハウス」(73)などのテレビ・ムービーにたまに出演する程度となった。88年には再び往年の当たり役に挑んだ単発の「帰ってきたベン・ケーシー」に主演。ベトナムの野戦病院から、かつて勤務していた州立病院に脳神経外科医長としてケーシーが戻ってくる。だが、ゾーバ博士はすでに亡く、医学を熱く語り合った同僚で親友だったテッドは医療会社の経営者として大成功し、激務でつねに医療訴訟のリスクにさらされる医者なんかバカバカしくてやってられないと言い放ってケーシーを落胆させた。病院周辺の治安も悪化していて、アメ

リカ社会の荒廃や医療の問題点があらわに描き出される。ケーシーの相も変らぬ独善的な姿勢は職員たちとの軋轢を生むが、医者としての技量や高潔な人格は次第に尊敬を集めてゆく。だが、シリーズ化には至らず、私生活では4度の結婚やギャンブル依存となつて96年にすい臓がんのため67歳で死去した。最晩年には、金の無心をするので親しい友人たちはみんな離れていった、と自嘲的に語っていた。

シリーズ終了後にイギリスで演劇修行をして、「三銃士」(73)「タワーリング・インフェルノ」(74)などに出演したライバル「ドクター・キルデア」のリチャード・チェンバレン、「パリー・メイスン」に続いて「兇警部アイアンサイド」でさらに成功を収め、晩年に「新・弁護士パリー・メイスン」を自信と余裕で生き生きと演じていたレイモンド・バーらとはあまりに対照的だった。ほとんど一発屋に終わったエドワーズは、ケーシー同様に不器用で融通が利かない男だったのかもしれない。

\*\*\*\*\*

## 「ベン・ケーシー」

1961～1966 モノクロ 60分  
ビング・クロスビー・プロダクション

出演：ヴィンセント・エドワーズ

サム・ジャッフェ

ベティ・アッカーマン

## 著者紹介

千葉豹一郎

作家・評論家。著書に「法律社会の歩き方」(丸善)「スクリーンを横切った猫たち」(ワイズ出版)(電子版はアドレナライズ)「昭和30年代の備忘録(電子版)」(ユニワールド)「猫と映画人(電子版)」(アドレナライズ)等の他、「東京新聞」「ミステリマガジン」(早川書房)「猫生活」(緑書房)等をはじめ連載も多数。独特の切り口で草創期からの外画ドラマの研究や紹介にも力を入れている。

© Miriamword Co., Ltd.



### 昭和30年代の備忘録 for iPhone

あの日、未来は明るかった――。  
慌ただしくもほっこりと、現代人の郷愁を誘う  
“昭和30年代のマスカルチャー”

ケーシー先生やカッパに憧れ、アトムや鉄人に見習い、カラーテレビが、クーラーが、ハンバーガーショップが身近に押し寄せてきた夢いっぱい少年時代。一方で、周りを見回せば捨てられたガム、連続する鉄道大事故、暴走タクシー。牛の船橋の馬肉100%コンビーフや怪しい怪しいアイスは売られ、食の安全はそっちのけ状態。“古き良き昭和”ばかりではない、リアルな日本の高度成長期を描いた軽快なエッセー。

大田区大森を中心に、高度成長期の東京がいまもときどき見えます。



付録ムービー  
テレビ・芸能

1. テレビの青春時代
2. 新編大スターアメリカのドラマ
3. アロシカ力進山
4. 実写版「鉄腕アトム」と「鉄人28号」
5. コマソンの女王 橋トシエ

家電

6. 電気釜の裏づけ
7. カラーテレビ狂想曲
8. リモコンテレビが欲しい!
9. クーラーをひたすらまわると死ぬ!!
10. ホラロイドカメラ
11. 可愛いワジベトカメラ
12. 8ミリフィルム

食

13. モナカカレーと「少年ジェット」
14. アメリカンドッグ車始めのトシエ
15. ハンバーガーの歴史
16. スイッチは始まる?
17. 味のワルミン
18. 駄菓子屋とお菓子屋のあつたころ
19. 粉未ジュース感懐記
20. 傑作! 噴水型ジュース自販機
21. 10円アイスクリームが花盛り
22. 酒えたガムつづれ

ホビー

23. 鉄の手裏剣
24. 2B筆とクラッカー
25. 観玉鉄砲の王道

26. 輝くマテル
27. 集まった金属製のモデルガン
28. プラモデル熱中時代
29. 社会・文化
30. ケネディの時代
31. 外車愛蔵記
32. 国産車は離世車?
33. サンドイッチのような車の三角窓
34. デパートはワンダーランド!
35. 町の映画館
36. 折りたたみ式コップ
37. 月宵マンガ誌と特撮
38. ベテララのソノシート

**\*当書DVD版は、月刊FDI編集部にて\***  
 本文：108ページ / 映像：2分23秒 2012年9月ミリアムワード(株)発行  
 価格：1,980円(税込)  
 株式会社ユニワールド 東京都世田谷区上北沢3-17-5 杉本ビル1F  
 TEL.03-6379-8890 FAX.03-6379-6190 info@uni-w.com